

消 息

左右田文庫の分類を終へて

一

左右田博士の藏書が商大圖書館に移されて左右田文庫として所藏されることになつたのはもう大分昔のことである。そのときには藏書に只事務的に通番號が打られた丈であつてそのまま今日に及んでゐたのである。利用の上からも、内容を知る上からも甚だ不便が多かつた。その整理が必要であることに着目してそれを企てられたのは杉村博士であつた。しかしそれはいろいろのことで實現されなかつた。内容の點以外にも多くの未整理事項があつたのだつたが、それは吹田館長、小田橋助教の盡力に依つて二三年前完了し、たゞ、内容の分類、目録作成丈が残されたことになつた。私にそれをやれといふ話を受けたのはそのころのことであつた。

最初是一年でといふことであつたが一年半位はと見積つて引

受けたけれども、中々に抄らず二年かかつてやつと分類の仕事を終へたのである。この間に種々の困難に逢着したが解決のためには専ら上原教授に教示を仰いだ。七千もある藏書の整理はたとへカードが出来てゐたとしても容易なことではなかつた。多くの勞力が必要であつたが、幸にも學生高橋英一、新宮徹也、山崎昶三君が全く獻身的に助ける以上のことをしてくれたのでお蔭で目鼻がついたのである。特に新宮、山崎兩君はこの仕事の全期間を自分の勉強を犠牲にして協力してくれたのであつた。貴重な夏、冬の休暇をも費してくれたのである。尙、書物の頁を取る仕事るときは、なほ多くの學生諸君を煩はしてあの悪氣流の書庫で仕事をして頂いたのである。仕事のうち圖書關係の専門的知識を要するものについては阿曾氏を煩はした。分類不明なものについては多くの教授助教の教示に俟つところが多い。分類が一應完成した機會に、この仕事はこれらの人々の努力の結果であるに過ぎないことを表明し、深厚なる感謝を捧げたのである。

本文庫は通番號六、一〇七を以て終つてゐる。同一番號の中
には版が全く同じであるために同一に取扱はれてゐるものも、
一冊に裝幀せられてゐるためにならなつてゐるものも、
のちのち同一番號になつてゐるものや同じものが異番號になつてゐ
るものや、つらつらあつて、この數を冊數とするものも、部數とす
るものも正當ではなからぬ。今度はこれを大、同版のものには同一番號
とし、全く異つてゐるものは異番號とする等手を加へてゐる
が未だ多くの困難があるやうである。

さう分類は次の如くである。同一のカーネを二項目以上とす
類したものは數多から部數は藏書部數と同じにならぬ。

- A Philosophie
- a Altertum und Mittelalter 46
- b Neuzeit 1200
- B Klassiker-Studien 1771
- C Philosophie der Gegenwart
- a Allgemeine 403
- b Geschichte der Philosophie 153
- c Erkenntnistheorie 127

- d Logik 67
- e Ethik 52
- f Aesthetik 51
- g Psychologie 68
- h Geschichtsphilosophie 42
- j Rechtsphilosophie 48
- k Religionsphilosophie 44
- D Mathematik 144
- E Naturwissenschaft 148
- F Rechtswissenschaft und Staatswissenschaften . 72
- G Soziologie 175
- H Sozialismus 333
- J National-Oekonomie 496
- K Geschichte 99
- L Kunst und Kunstgeschichte 256
- M Schöne Literatur 98
- N Sprache 17
- O Lexikon 27
- P Vernunftes 19
- Q Zeitschrift 4

文庫の三分の二以上は哲學に關係あるものである。分類記號 D—Q までについては大して異論もあるまいと思ふが、A—C まで即ち哲學に關するものにはいろいろな困難と疑問とがあつたのである。それに就て少し説明を加へ度い。

哲學のものを處理するには二つの方法がある。一方は、哲學者に中心を置いて同一哲學者の著作全部をその著者名項目に纏めて整理する方法で、他は、著者を無視して哲學の問題別に分類する方法である。前者は容易ではあるが不便も多く、後者は分類の標準が極めて困難である上に、分類を施したものの標準と檢索をするものの標準とが相違するし、もつと根本的には例へばカントのものが方々に見出されるといふ缺陷が表れる。それに哲學の書物は分類に簡單なようにはかかれてゐない。いろいろ迷つたのであつたが結局、一八五〇年以前に生れた哲學者のものはその著者の名の下に纏め、以降のものは現代哲學のものとして項目による分類を施したのである。

尚、哲學者に關する研究が多かつた。これは他にこんな處理法を探つてゐるところがあるかどうかはしらぬが、*Klassiker-Studien* といふ大項目の中で、研究されてゐる人を中心として纏めて見た。特に著しいのは古代ではプラトンに關するもの、

近代ではカントに關するものが歴倒的に多いことであらう。

以上が A B C の説明であるが私の心持としては A のうちには古代よりの哲學の主流を構成するものが含まれ、B のうちにはその主流に對する研究と批判とが含まれることが意圖されてゐるのである。誰が主流を構成するかは主觀的には全く決定不能であるが、*Isler: Philosophen-Lexikon* に準據することによつて稍客觀的になつたことと思つてゐる。それでも千人に近い哲學者を辭書で調べるのは相當な努力を要した。この辭書は實によく調べが行届いてゐて、僅か二三十頁の小冊子を見捨てようとして思ひ返してこの辭書を調べたら、問題の小論文がその著者の唯一つの文獻であることが判明してこちらの輕卒なことを恥ぢたことなどもあつたのである。一八五〇年をどうしてとつたかといふことも全く便宜によつてとしか答へられない。十九世紀前半といふ言方でもいゝのかもしれない。最初はもつと主觀的に古典を集めようとしたり、或は、年代順に處理する方法などを考へて見たり勞多くして得るところなきものを想ふたりしたのであつたが結局は全體として極くありふれた便宜的なものになり終り、殘念なようにも考へて見たが又一方では、便宜的なものに捨てがたさがあることが永い苦勞の後で始めて明かになつたのである。便宜的といふことは他の項目に於ても

充分考慮せられた。

かくて、一八五〇年を現代哲學として、それ以前を古代中世哲學と近世哲學とに分けたのである。現代のものはどんな著名な哲學者のものでも分出させるのを原則とした。

終つてみると獨逸思想史の主流や底流や淀みや激するところや、などが目に見えてくるやうな氣がして来る。脈々と流れてくるものが感じられる。こんなよいものを残して下まつた左右田博士に追慕の情禁じがたきを感じるのである。(太田可夫)